

弔辞

昨日の夕方、妻が孔徳学校の陶先生からの電話を受けた。ただ一言、「^{キキ}齊可が亡くなった——」と言うのだ。齊可はその十年生で、胆石症(?)を患っていたので協和病院へ治療に行ったのだが、あとで待遇が不親切だということで、ドイツ病院に入り直し、昨日手術をしたが、ついに覚めなかったのだそうだ。彼女は学校では高学年生であったし、又天性豪爽で親切だったので、我が家の三人の子どもが初めて学校に上がったころ、みな彼女の世話を受け、まるで大きい姉さんの様であった。今度の突然の死別に、子どもたちは驚いたけれども、まだ彼らの親友を失った悲哀は理解できない。しかし妻はいつも学校へ行って彼女とは馴染みであったので、昨日知らせを聞いた後は長らく呆然として、一晚眠れなかったのは、実に怪しむに足りない。

死は総て悲しむべき事であるが、特に青年男女の死は。死の悲しみは死者に属さず生きている人間のものであるけれども。常識からいうと、死は自然の負債を還すことであって、誕生と同様厳粛にして平凡である。われわれが死者に対して示すべきは一種の敬意である。それはわれわれがゴールの下まで走った競走者に対するがごときものである。彼が一着であれ、あるいは途中で何度か躓いて最後に走りついたのであれ。中国の今のような状況のもとでは、「死の賛美者」(Peisithanatos)という言葉は必ずしも全く無意味ではない。ならば「歳は短いけれども憂も亦少ない」のはよい事だとも言える。たとい未だ日光を見ない者の幸福には及ばないとしても。しかしながら死者にとってたとい本当に安楽であっても、生きている人間にはどうしても悲しい。われわれが死者を哀悼するのは、必ずしもその滅亡の悲哀を了解することにあるのではない。実は多くが追懐の念を引き起こし、痛切に今昔存没の感を生ずるからである。どのように無神を信じようと、あるいは厭世であろうと、こうした感傷は結局払いがたい。日本の詩人小林一茶は『おらが春』に彼の娘聡女の死を記して、次のように言う。

「……彼女はついに六月二十一日木槿の花とともにこの世を謝した。母は死児の顔を抱いて、おうおうと大泣きをしたが、これも怪しむに足りない。今になって明らかに、逝く水の帰らざる、散る花の枝に戻らざるを知ったけれども、どのように達観しようが、終に想いを断ちがたいのは、まさにこの恩愛の絆なのだろう。〔詩以て哀を志す〕

露の世や。

露の世ではあるけれども、

そうではあるけれども。」*

露の世ではあるけれども、しかしながら自ずと露の世の記憶はある、だからこそ相変わらず哀感が多いのである。メーテルリンクは『青い鳥』のなかで一句平凡な警句を吐いている。「死者は生きている人間の記憶に生きている。」齊さんは世にあること十九年、家庭・学校・親族・友人の間に、当然多くの磨り減ることのない印象を残している。したがって悲哀を引き起こすには十分である。われわれはそれらの人々の心情を思いやると、実に同情にたえない。別にかけるほどの慰めの言葉はないけれども。死にはもともと善悪はない。しかしそれが生きている人間に加える害は浅くはないから、やはりそれは悪だと言わざるをえない。

わたしは人間に靈魂があるのかどうか知らないし、おそらく今後も永遠に知らないだろう。だが死後の生活を希う心情についてはとてもよく理解できると思う。人が死後にももし生前と同じようになお靈魂をもつ存在であるならば、解決が容易でない困難が生じるだろうことは推測できるけれども、そのために滅亡の恐怖を消すことができるばかりか、いわゆる恩愛の絆もそれにふさわしい慰めを得ることができるだろう。人間は何か満足できない願望があれば、無意識のうちに儀式や神話に投影する。ちょうど夢の中に現れるのと同じように。伝説の李夫人や楊貴妃の物語、民俗での童男童女が死後召されて天帝の使者になるという信仰、いずれも無聊の極みの考えであるが、また本当の人情の美しさの表現でもある。われわれはそれが迷信だとは知っているが、わたしはこのような虚しい幻想の迷信の中にも自ずとその美と善の分子が存在することを確信する。これは死者の家族親友にとってどんなによい慰めになることか。もし彼らが信ずるならば——信じることができさえすれば、百歳の後、あるいは夢の中夜の内に、すでに死んだ親愛する者と相集まり、相見えることができるのだ。しかしながら、残念なことにわれわれはそれには不相応に科学の洗礼を受けてしまって、先人たちの祝福すべき愚蒙を失っている上に、さらに画廊派の哲人（Stoics）の超絶的な忍耐強さも養成していない。その結果はあたかも齒根に露出した神経のように、冷風熱気に従っていつでも痛さを増すばかりである。幻滅した現代人が不幸に遭遇することに対して、われわれはここに特に同情の意を表さざるをえない。

われわれの娘若子が病気になった時、斉さんはとても彼女に気を遣ってくれた。いま若子はもうよくなったが、まだ学校に行って親友とは顔を合わせていないのに、その人自身がいなくなった。いつか若子が思い返した時、やはり永遠の遺恨となるであろう。 民国十四年五月二十六日夜。

* 小林一茶『おらが春』（岩波版日本古典文学大系 58）「終に六月廿一日の葬の花と共に、此世をしばみぬ。母は死兒にすがりて、よゝよゝと泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行水のふたたびは帰らず、散花の梢にもどらぬくひごとなどゝ、あきらめ兒しても、思ひ切りがたきは恩愛のきずな也けり。 露の世は露の世ながらさりながら 一茶」